

# 問題-解決パターンを使った研究レポート作成指導

沖田弓子 田代ひとみ

## 要 旨

「問題-解決パターン」とは、「状況-問題-対策-評価」という4つの要素からなる文章構造である。本稿では、この「問題-解決パターン」をレポート本論の論理展開の基本形として導入した研究レポート作成指導過程の実際を報告するとともに、学生の書いた第一稿と最終稿を分析することにより、研究レポート作成における問題点を探った。さらに、事後のアンケート結果から、本指導の効果を確認した。レポートの分析結果からは、本論の「対策-評価」部分および結論部の「論点を適切さ」に問題点が多く、特に「評価」と結論部はフィードバック後（最終稿）でも改善されにくい、引用や図表の説明に問題点が多い、などの点が明らかとなった。

キーワード：レポート・論文作成指導 レポートの構成 問題-解決パターン  
フィードバック

## 1. はじめに

大学においてレポート作成は重要な役割を占めており、その作成技術の習得は学生にとって最も大きな課題となっている。産能大学ではそうした課題に応えるため、1996年にテキスト『研究発表の方法-留学生と日本人学生のためのレポート作成・口頭発表の準備の手引き-』を開発し、大学での研究論文作成の初歩として「問題-解決パターン」という文章構造を使った研究レポート作成指導を行ってきた。

本指導には次の2つの特徴がある。第一の特徴は、問題-解決パターンをレポートの論理展開の基本型として導入し、研究レポートにおいて何をどのような順序で書くかを明確に指導している点である。問題-解決パターンとは「状況→問題→対策→評価」という4つの関係の連鎖により構成されるパターンのことで、McCarthy (1991 p. 30) は、このパターンは「テキストにきわめて一般的なもの」と述べている。このパターンを英語のライティングの指導に応用したものに、Hamp-Lyons, Heasley (1987)がある。Hamp-Lyonsらは、アカデミックライティングにおけるテキストにはさまざまなタイプがあるが、「それらの全体としてのテキスト構造は、ほとんど同じである」(p. 100)と述べ、その共通のテキスト構造として「situation-problem-solution-evaluation」のパターンを提示している。こ

のように、英語教育で、問題-解決パターンはアカデミックライティングにおいて、非常に一般性の高いものとして使われている。

レポートや論文の書き方についての本はいろいろあるが、その多くは「序論、本論、結論」の3段構成を示すにとどまり、最も重要な本論の展開について具体的に示したものはあまりない。そこで本指導では、問題-解決パターンという一定の型を示すことにより、レポートをまだ一度も書いたことのない学生にとっても、わかりやすく具体的なかたちでレポートの本論の構成方法を提示している。

次に、問題-解決パターンの4つの要素の具体的内容がどのようなものか、何を論じるのかを述べたい。まず、「状況」では、定義（それはどんなことか）、現状（今どんな状態か）、原因、背景などを論じる。「問題」では、その影響や議論されている点を、「対策」では、その「問題」の解決方法を論じ、最後の「評価」では、前に述べた「対策」の有効性を評価する。すなわち対策の問題点は何か、その対策で問題は解決できそうかを論じる。例えば、テーマ「少子化」の場合は次のような構成になる。

#### テーマ「少子化」の例

状況 situation	… 定義、現状、原因、背景	[少子化とは何か、少子化の現状、原因]
問題 problem	… 影響、議論されている点	[少子化が社会に与える影響]
対策 solution	… 解決方法	[国や企業の少子化対策]
評価 evaluation	… 対策の有効性	[国や企業の少子化対策の問題点]

次に、この指導の第二の特徴は、レポート完成までの各ステップで細かいフィードバックを与え段階的な指導を行っている点である。特に、学生が完成したレポートに教師が詳細なフィードバックを与え、それに従って書き直しをさせる改訂作業を指導過程に組み入れている点である。

## 2. 研究レポート作成指導の概要

本指導は、学部留学生1年生後期の必修科目「日本語Ⅱ」において行われている<sup>1)</sup>。授業回数は、週2回の全25回であるが、これには口頭発表の練習も含まれているので、レポート作成指導は、この内の約20回である。この科目の受講者は毎年30名前後であるが、2000年度受講者は、3クラス計32名であった。内訳は、中国19、台湾7、韓国6名で、いずれも経営学もしくは経営情報学を専攻する学生である。学生は、日本語学習歴1～2年の者が多く、日本語のレベル幅、さらに知的関心の幅も学生間でかなり大きなばらつきがある。

## 3. 指導過程の実際

テーマ選びからレポート完成までの指導過程は、次の通りである。

### 3.1 テーマ選び

テーマは、クラスでの問題意識の共有のしやすさなどの点で「現在進行中の社会問題」の中から選ぶことにしているが、そこからさらに、資料収集がしやすいテーマを教師がリストアップしている。2000年度のテーマは、次の15テーマである。【砂漠化、地球温暖化、オゾン層破壊、酸性雨、野生生物の減少、森林破壊、環境ホルモン、ダイオキシン汚染、人口爆発、家庭ゴミの増加、児童虐待、男女賃金格差、覚醒剤中高生汚染、拳銃所持の増加、ドメイン・バウンス】学生の中にはこれらのテーマについての知識の乏しい者もいるので、テーマを選ぶ前にタスクシートを使って、クラスで各テーマについて知っていること話し合うなど、問題意識を高める活動を行う。またここでは、今後の作業に必要な「現状」「対策」「課題」などの語彙や概念の確認も行う。

### 3.2 事前調査とその報告会

事前調査とは事典的な資料にあたってテーマについての一般的知識を得る作業で、この作業を経てはじめてテーマが確定する。本指導では、『現代用語の基礎知識』『イミダス』『知恵蔵』『朝日キーワード』などの資料を使っている。ここでは、調査で把握すべきポイントとして、「1. 定義、2. 現状、3. 原因/背景 4. 問題/影響、5. 対策、6. 評価/課題」の6点があらかじめ印刷されたタスクシートを使い、学生はこの段階から問題-解決パターンフレームを使って作業を始めることになる。事前調査をすることにより、これからどんな情報を集めればいいのか分かり、資料収集がやりやすくなる。また、このあとの段階で、情報の適否あるいは分類に混乱が生じた時、このシートに戻れば問題が解決しやすいというメリットがある。授業では、クラスワークによって「少子化」を例に調査の練習を行い、そのあとで各自のテーマについて調査する。調査の結果はクラスで「事前調査報告会」を行い、学生相互に批評し合うとともに、教師からもフィードバックを与える。

### 3.3 仮アウトライン作成

次にレポートのおおよその構成を考える。これを仮アウトラインと呼んでいる。ここでは、問題-解決パターンに従ったレポートの章立てのおおよそのフレームが印刷されているタスクシートを使う。資料1はテーマ「日本社会の少子化」の記入例である。1章が「序論」(研究の目的)、2～6章が「本論」(調べた事実)、7章が「結論」(考察)になっている。学生は、事前調査の結果などを参考に、自分のアウトラインを作る。この仮アウトラインが出来た段階で、「現状、原因、影響、対策、対策の問題点、課題」というレポート全体の枠組みが決定される。

### 3.4 資料収集とその報告会

レポートの資料には、図書、雑誌、新聞の3種類を使う。クラスでまず、資料の検索方法や入手方法を実際に図書館に行って学習したあと、各自が自分のテーマの資料検索を行い3種類の文献リストを作成する。そして、「資料収集経過報告

会」を行って結果を報告し、ここでも学生相互に、また教師からのフィードバックを与える。また、資料を読む段階では、学生がレポートの構成をつねに意識しながら作業が進められるよう、資料の各情報には、「情報番号」（通し番号）を付けた上、「状況」「問題」「対策」「評価」のカテゴリーごとに色の違う付箋をつけて分類整理するよう指導している。

### 3.5 メモ付きアウトラインの作成と個別指導

次に、レポート執筆に移る前にレポートの内容の詳しいメモを作成する。これを「メモつきアウトライン」とよんでいる。ここで使うタスクシートには、仮アウトラインと同じ項目が印刷されており、レポートの内容が問題-解決パターンの枠からはずれないようにガイドする役割を果たしている。資料2はテーマ「日本社会の少子化」の記入例である。クラスでは、まず「日本社会の少子化」を例にメモの書き方を学習してから、個々の作業を行う。そして個別指導によって、教師から学生一人一人に内容に関する細かいフィードバックを与える。また、このメモの右端には資料の「情報番号」を記入する欄が設けてあり、指導の際には学生に使用予定の資料をすべて持って来させて、レポートの各章、各節で使おうとしている資料が適切かどうかについても、チェックしている。

### 3.6 レポート第一稿の執筆

レポート第一稿の執筆前に、資料3のような「日本社会の少子化」をテーマにしたレポートモデルを提示し、レポートに必要な表現や書き方を指導している。このモデルはレポートの始めから終わりまですべて書いてあり、これをクラスワークで読み進めながら、レポートの形式、章や節、段落や文のつながり、接続詞、図表の説明のしかた、引用のしかたや注の書き方、などを学習する。

また、ここでも、問題-解決パターンに従って正しくレポートが構成されるよう指導上の工夫を行っている。まず、レポートの最初に目次として、章（アウトラインの1,2・・・）と節（アウトラインの(1)(2)・・・）の見出しを添付し、本文中にもこれと同じ見出しを入れるよう指導している。さらに、本文の執筆にあたっては、各節のはじめに「話題の導入・予告の文」を、おわりに「まとめの文」を挿入するよう指導している。これらの文はレポートの読み手の理解を助けるためだけでなく、レポート執筆の際、その節に入れるべき内容と異なる内容を書いてしまうという書き手の間違いを防ぐ指導上の狙いがある。

### 3.7 レポートフィードバックと最終稿作成

レポート第一稿には、教師からフィードバックを与え、学生は改訂作業を行う。レポートフィードバックの具体的なチェックポイントは、大きく分けて「本文の構成・内容」に関するものと、形式等を含む「その他」に関するものがあり、全体で1～14の項目に分かれている。1～14の項目名と項目ごとの具体的なチェッ

クポイントは、資料4「第一稿の問題該当者の割合と最終稿の改善点」に示す通りである。「本文の構成・内容」に関する1～7の項目では、問題-解決パターンの各パートすなわち各章ごとに「論点の適切さ」「各論点の関係」「各論点の説明のしかた」についてコメントを与え、レポートの基本構成と情報の整合性に学生の目が向くようにしている。「その他」の8～14の項目では、レポートの形式、引用・注、資料、図表、文体、原稿用紙の使い方、日本語についてそれぞれコメントしている。

フィードバックは個別指導とし、学生にコメントを記入したシートをつけてレポートを返却し口頭でもフィードバックを行った上で、書き直しをさせる(注2)。

#### 4. フィードバックの実際

##### 4.1 レポート第一稿の問題点

次に、レポート第一稿ではどんな点が多く問題となるか、最終稿でそれらがどの程度改善されたかについてを、2000年度のレポートフィードバックの結果から紹介したい。

資料4の「第一稿の問題点」の数値は、第一稿のそれぞれの項目で問題があった学生の割合を%で示したものである。50%以上の学生が指摘された項目を、問題の多かった項目のめやすとして☆で示している。

##### 4.1.1 本文の構成・内容

まず、「本文の構成・内容」では、後半の章ほど☆が多くなっている。項目の自身を見てみると、レポート前半の2章「現状」、3章「原因」、4章「影響」では、「各論点の説明のしかた」に問題点が多くなっている。これに対し、レポート後半の5章「対策」、6章「対策の問題点」、7章「課題」では、「各論点の説明のしかた」だけでなく「論点の適切さ」や「各論点の関係」にも問題が多く現れている。つまり、レポート前半では、資料から論点を見つけることはできるが、その説明を書くのが難しいということがわかる。それに対し、レポート後半では、説明を書く以前の、資料から適切な論点を見つけるという段階で、すでに多くの学生につまづきがあることがわかる。

「各論点の説明のしかた」で具体的に最も多く見られる問題点に、説明不足-すなわち読み手が内容を理解するのに必要な情報が十分に述べられていないということがある。ある事柄についてどれくらいの説明を加えるかを判断するには、その事柄についての読み手の予備知識の量を推定する必要がある。日本人学生でも同じかもしれないが、特に留学生にとって、(第二言語の)読み手の予備知識の推定はより困難なものであろう。そのため、こうした問題点が多く現れるものと思われる。また、述べる順序も、重要な項目からそうでないものへ、という流れ

になるべきなのだが、こうしたことができないレポートも見られる。テーマについて、事前に一般知識を持っていればそれはむずかしくないと思われるが、このレポートを書くに際して初めてそのテーマに取り組むような場合、こうした点も問題となることが考えられる。

各論点の下位情報については、「メモ付きアウトラインの個別指導」の際に指導しているが、細部は最終的には書き手が実際にレポートを執筆しながら決定してゆくため、メモでは適切な情報であったものが、レポート第一稿では不適切なものに変わってしまうこともある。個別指導の際に、何をどう書くつもりか、メモをもとに、より細かく学生に確認しながら指導をする必要があるだろう。

また、レポート後半の章で「論点の適切さ」に問題点が多く見られる理由としては、次のような点が考えられる。まずひとつは、資料の読みとりの難しさである。一般に資料には、現状、影響などは、詳しく述べられている場合が多いが、対策の問題点や課題等に関しては情報量が少なく、記述も現状や影響ほどわかりやすく書かれていないため、適切な論点を見つけるのが難しい。また、レポート本論の中でも特に5章「対策」、6章「対策の問題点」、7章「課題」は、論点が一貫して関連して述べられていなければならない部分であり、そうした論点の一貫性を保つのが難しいという点がある。特に、問題点を指摘された者が91%にのぼる7章「課題」（結論）では、資料の情報を参考にしながら事実についての自身の考察を述べることが要求されており、適切に論点を立てることがさらに困難になるものと思われる。

#### 4.1.2 その他

次に、「その他」の方の項目で特に問題が多いのは、「14 日本語」の「文法的に正しい文で書いてあるか」と、レポート本文の各節に挿入すべき『導入・予告の文』と『まとめの文』である。また、「9 引用・注」の「自分の文章に引用した情報がうまく組み込んでいるか」、「注の書き方は適切か」（注3）のように、引用や注も学生にとって難しいことがわかる。さらに、「11 図表」の「説明」や「出典を明らかにする」など図表の取り扱いにも問題点が多く見られる。

「引用・注」の具体的問題点としては、元の資料の文脈の流れに入っている文をそのまま引用してしまい、自分の文脈に合わせて要約したり書き換えたりできないでいるものが多い。「図の説明」についても、元の図表の情報から自分のレポートに必要な情報が適切に取り出せなかったり、うまく説明できなかったりしているものも多く見られる。

「導入・まとめの文」や、引用や注、図表の説明の書き方は、指導過程の「レポート第一稿の執筆」で、具体例を挙げて指導をしているが、ほとんどの学生にとっては初めて学習する事項であり、実際のレポート執筆に取り入れるのはなか

なか難しいようである。

## 4.2 レポート最終稿の改善状況

では、最終稿ではこうした問題点がどの程度改善されたかを見ていきたい。資料4の「最終稿の改善度」の数値は、第1稿で問題を指摘された部分がどの程度改善されたかを1点から5点までの点数で表し、それらを合計して、指摘された学生の人数で割ったもの、つまり改善度の平均点を示したものである。1点は何も改訂作業をしていない、2点は改訂作業はしたもののほとんど前と変わらない、3点は改訂作業を行った結果、部分的に改善がみられる、4点は部分的に問題はあるが、だいたい改善されている、5点が改善されている、という基準にした。

ここでも、第一稿で該当者が多かった問題点に注目し、その中で改善度が高いもの、低いものについてとりあげたい。表で○をつけたのは、第一稿で50%以上の該当者があった問題点のうち、改善度が3.5以上と比較的高かったもの、×をつけたのは、第一稿で50%以上の該当者があった問題点のうち、改善度が1～2点台と低かったものである。

### 4.2.1 本文の構成・内容

まず、「本文の構成・内容」で○がついたものは、2章「現状」の「各論点の説明のしかた」、3章「原因」の「各論点の説明のしかた」が、ともに3.5以上で、改善が見られる。これに対し、6章「対策の問題点」の「論点の適切さ」、7章「課題」の「論点の適切さ」は、ともに2点台で改善度が低く、問題点の深刻さが再確認された。

論点を適切なものにするために、メモ付きアウトラインの個別指導およびレポートフィードバックでは、できるだけ具体的な示唆を与えるようにしているが、学生のテーマについての理解が十分でない場合には、それが生かされにくいようである。レポート後半部分に当たる論点については特に、指導過程のもっと初期の段階、たとえば事前調査などの段階から、学生の理解度を把握し理解を促す指導がさらに必要だろう。

### 4.2.2 その他

次に、「その他」の第一稿で50%以上の該当者があった問題点を見てみると、「8形式」の「本文に見出しを付ける」こと、「11図表」の「図表の添付のしかた」、「14日本語」の「導入・まとめの文」、「文末表現」などは、改善度が高くなっている。これに対し、「9引用・注」の「自分の文章に引用した情報をうまく組み込む」こと、「11図表」の「説明」などはあまり改善が見られず、レポートフィードバックでの問題点の指摘や方向性の示唆だけでは、問題を解決することが難しいということがわかった。レポート後半の論点の問題と同様、引用や図表の説明

についても、レポート執筆前の指導のありかたが重要だろう。これまでも記事の要約練習や、自分のレポートで使う予定の図表から例をとって説明を書いてみるなどの練習を行っているが、今後、練習量や方法をさらに工夫していく必要がある。

## 5. アンケート結果

では、学生自身はこの科目のレポート作成練習の効果についてどう感じているのだろうか。それを調査するため、コース修了直後の1年生と、過去の受講者（2年生以上の学生）に対してアンケートを行った。資料5がその結果である。

まず、〔1年生の結果〕を見ると、「レポートについてのフィードバックは役に立ったか」という質問に対しては、32名中22名が「とても役に立った」、5名が「少し役に立った」、1名が「どちらとも言えない」、4名が記入漏れとなっており、「役に立たなかった」と否定的な回答をした者はいなかった。また役に立ったコメントは、多い順に「レポート全体」「日本語」「形式」「文体」「引用・注」となっている。「書き直しのために何をしたか」という質問に対しては、「日本語を直した」「自分が持っている資料を読み直した」「情報を加えた」などが多くあがっている。「直すのが難しかったコメント」は、資料4の結果を裏付けるように「6章 対策の問題点」「7章 今後の課題」などが多くあがっている。「このフィードバックは今後、日本語以外の授業のレポート作成に役に立つと思うか」という質問には「とても役に立つ」「少し役に立つ」合わせて31名が肯定的に答えている。また、「問題-解決パターンのレポートを書く練習が、他の科目のレポートを書くとき役に立つと思うか」という質問には、同様に「とても役に立つ」「少し役に立つ」と合わせて31名が答えている。

次に、現在他の科目で多くのレポートを書く経験を積んでいる2年生以上の留学生49名（注4）の結果をみると、まず、「この科目が現在日本語以外の科目でレポートを作成するのに役立っているか」という質問に、35名が「役に立っている」、14名が「少し役に立っている」と、全員が肯定的な回答をしている。また役に立った練習は、「レポートの構成の仕方」が最も多く、ついで「日本語」、「資料収集」をあげており、問題-解決パターンを使った文章構造の指導が評価されているようである。また、自由記述欄にあった意見では、「大変だったが今役に立っている」、「レポートを書いて自信がついた」「知識がひろがった」「この構成を他のレポート・発表のときによく使っている」などが多く見られた。

## 6. 今後の課題

以上、問題-解決パターンを使った研究レポート作成指導の実際、レポートフ



フィードバックの実際、アンケートの結果について述べてきた。この授業が1年生だけでなく2年生以上の学生からも評価され、特に2年生では「構成」が最も役に立った項目として挙げられていることから、この指導が大学で必要なレポート作成技術の習得に一定の効果を上げていると言えるのではないかと思われる。

しかし、今回レポートフィードバックのデータから、いくつかの課題も明らかになった。「構成・内容」に関しては、レポート後半の「論点の適切さ」が、「その他」では、引用や図表の説明といった資料の情報の活用のしかたが、最後まで残る問題だということがわかった。後半の「論点の適切さ」については、これを改善するためには、前に述べたように、早い段階から学生のテーマに対する理解を深めさせる工夫や、さらに資料の読解を助けるような指導、より適切な資料を入手させたり、個別フィードバックで学生が持ってきた資料から必要な部分を発見させるなどの指導が考えられる。また、資料の情報の使い方などの問題点については、タスク問題などで練習を重ねるほか、レポート全体を執筆する前に章または節をひとつ取りあげて先に書かせフィードバックを与えるなどの方法も考えられる。今後は、こうしたより効果的な指導方法について検討していきたい。

## 謝辞

本研究をまとめるにあたり、産能大学の斉山弥生先生、産能短期大学の鬼木和子先生、長谷川玲子先生からご指導、ご助言をいただきました。ここに感謝の意を申し上げます。

## 注

- 1) 前期の「日本語Ⅰ」では、情報収集の方法、ノート・テイキング、ディスカッションの方法、答案の書き方など、留学生が日本人学生とともに大学で学ぶために必要な基本的スタディ・スキルの指導を行っている。
- 2) 最終稿は、口頭発表の評価と共に「日本語Ⅱ」科目の成績評価の対象となる。
- 3) 引用した文章に注を入れないということは、日本人学生が書いたレポートでもしばしば問題になるように、徹底することが難しいようである。
- 4) この数字は、アンケートを渡せなかった学生もいたため、在学している受講者全員の人数ではない。

## 〈 使用テキスト 〉

産能短期大学日本語教育研究室(1996)『研究発表の方法—留学生と日本人学生のためのレポート作成・口頭発表の準備の手引き』凡人社

## 〈 参考文献 〉

- 木下是雄 (1990) 『レポートの組み立て方』 筑摩書房
- マイケル・マッカーシー (1995) 『語学教師のための談話分析』 大修館書店
- Hamp-Lyons, L. and Heasley, B. (1987) “*Study Writing*” Cambridge University Press
- Hamp-Lyons, L. (1989) “*The Newbury House TOFFL Preparation Kits: Preparing for the Test of Written English*” Newbury House
- Hoey, M. P. (1983) “*On the surface of Discourse*” London: Allen and Unwin
- Markman, R. H. and Waddell, M. L. (1971) “*10 Steps in Writing the Research Paper*” BARRON’S EDUCATIONAL SERIES, INC.
- McCarthy, M. (1991) “*Discourse Analysis for Language Teachers*” Cambridge University Press
- Ulla Connor, Robert B. Kaplan (1987) “*Writing Across Language: Analysis of L2 Text*” ADDISON-WESLEY PUBLISHING COMPANY
- White, R., and Arndt, V. (1991) “*Process Writing*” Longman

(産能大学)